



## 香港便り その27

### 香

港島の南側にWAMONNO  
artという、日本人アーティストを主に扱ったギャラリーがあるのだが、そこでたまたま自作自演のショーを催す機会を得た。コンクリート打ちされた無機質な空間とガラス張りのショーウィンドウのようなバルコニースペースはアート作品を飾るために設計されている。視線を集約するようにデザインされているのだ。その視線をテーマに作品に利用できないだろうか。

僕は谷崎潤一郎の名作『痴人の愛』を演じることにした。主人公のサラリーマン、讓治がナオミという美少女と出会い、彼女を引きとり理想的な女性として育てていく中、ナオミが性的に豹変していく。シンプルでほぼ100年前に書かれたものにもかかわらず、時代を感じさせない物語だ。現代日本だけではなく香港でさえも通じるような普遍性がある。

僕が初めて『痴人の愛』を読んだのは高校生の時だった。男子校に通う高校生が男だけの、いわば異常な温室の中から見たナオミへの印象と、さまざまな国の社会や文化を経験し、たどり着いた香港で今改めて感じるナオミへの

の印象は違うものだった。僕が通った中流階級の子弟が集まる学校の生徒の母親のほとんどは専業主婦で、僕らは自然と「女性の役割は良き母親像にある」という考えを持っていた。そして男子校という特殊な環境下で母親以外の女性との関わりを遮断された僕は歪んだ女性への視線を醸成していたのだ。そんな中、魔性の女ナオミに対してある種の憧れと同時に恥を覚えたのだった。讓治、そして読者という男性視線がナオミの行動を批判する。

『痴人の愛』が文壇に登場して以来、ナオミの魔性さがセンセーショナルなトピックとなってきたが、僕は今回『痴人の愛』をダンス作品に落とし込む際に、彼女自身よりも彼女の行動を「規範外にある異質」と認定する男性的社会構造、つまりは主人公讓治の持つコンプレックスに着目した。ナオミの破天荒な行動は讓治の歪んだ劣等感を反映していて、実は讓治とナオミはコインの表と裏なのではないだろうかと思いを始めた結果、僕は2人のキャラクターを自分1人で演じることにした。

イギリスの著名な美術評論家で作家のジョン・バージャーは「見るという

こと」というエッセイの中でこう語っている。「男は女の夢を見る。女は自分が夢見られるのを夢見る。男は女を見る。女は自分が見られているのを見る」。

かつて僕がそうであったように、環境によって僕らは無意識かつ自動的に社会全体の男性視線に参加し、女性の行動を制限しているのではないだろうか。自戒の念とともに僕はガラス張りのショーウィンドウの中で踊った。ガラスに映るのは口紅を纏ったナオミであり、讓治であり自分であった。

## 『痴人の愛』を新解釈で踊る

文 高野 陽年

text by Yonen Takano

### Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。ヨーロッパ、北米、日本を含めさまざまな劇場における公演で主役を務めた。そして2021年7月より香港バレエ団に活動の拠点を移し、さらに活躍の場を広げている。立教大学中退。

